

平成23年度 成和小学校校内研究の概要

1 研究主題

『生活に根ざす（生活を豊かにする）コミュニケーションの担い手をめざして』
～対話力の育成と対話活動の活性化～

2 主題設定の理由

(1) 学校の概要

本校は、これまで思いやりの気持ちを持ち、主体的に実践しようとする児童の育成を研究主題とし、研究を進めてきた。平成18年度までは体験学習と道徳を柱に据え、また平成20年度までは道徳に一本化し、主題実現のために理論研究・実践を深めてきた。十分とは言えないが、友達の良さに目を向け、友達の思いを受け止めようとする児童が増えてきた。しかし、人の話を聞けない、自分の考えをみんなの前で言えない、発表の仕方が身に付いていないなど各教科を支える基本的な学習についての問題点が指摘された。話す・聞く力は、学習はもちろん人間関係を築く上で基盤となる。その力が身に付けば児童の相互理解が深まり、生活も豊かになると考える。

(2) めざす学校像

本校の教育目標は『ハート』『パワー』『チャレンジ』を合言葉とし、あたたかく、力強く、目標にチャレンジする子どもをひとりひとりの中に具現化しようとしている。教師が児童を教えると同時に教師も児童から育てられることも大切に考えたい。具体化に向けて次の観点で学校づくりを創造する。

- ①清潔で、笑顔あふれる学校
- ②生き生きとして活気に満ちた学校
- ③分かるまで共に学び合う学校

【めざす児童像・教師像】

めざす児童像

- ・積極的に人と関わり、素直に表現できる児童
- ・意欲をもってのりこえる、心身共に強い児童
- ・分かるまで学び合う児童

めざす教師像

- ・1時間の授業を大切にする教師
- ・児童理解に務める教師
- ・心あたたかい教師
- ・研修に励む教師
- ・地域、保護者の期待に応える教師

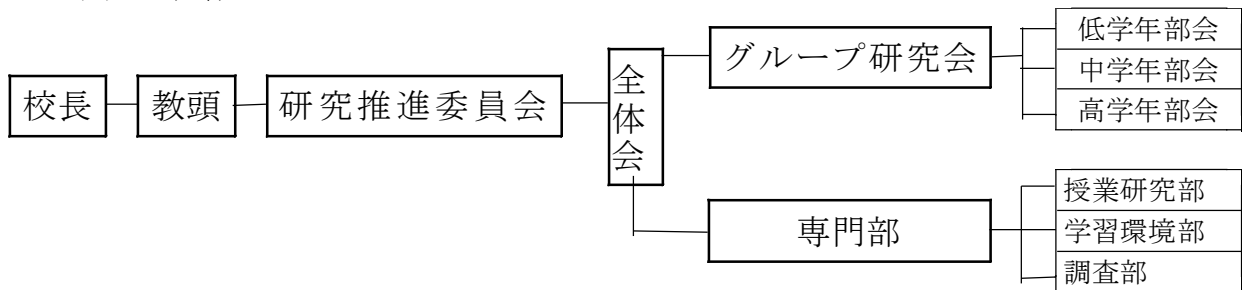
このような実態を考慮して、対話力・対話活動を中核とし、コミュニケーション能力を伸ばすことにより、上記の課題解決を図ろうとする。

3 研究の目的

人間が社会生活を営み、生き抜いていくためには、ことばのやりとりは欠くことができないものである。対話は生きる力の根幹となり、心や考えることを育て、人と関わることを身に付けるような実を持っている。これが対話活動の活性化と対話力の育成を掲げる理由である。

本研究の目的は、児童の対話力の向上と対話力の活用（対話活動を生かして学習指導法）に限定する。まず学校の責任を果たすことを主眼とし、児童を育てることはもちろん、教師もレベルアップしていくことを考える。言い換えれば、児童の対話力を向上させるための教師の指導技術の習得を求めて、その内容と方法に関して、その過程を明らかにすることを目的とする。

4 研究の組織



5 研究の目標

平成21年度から3年間、研究主題を『生活に根ざすコミュニケーションの担い手をめざして』、サブテーマを「対話力の育成と対話活動の活性化」として研究を進める。ここでいう対話活動は学習指導要領『話すこと・聞くこと』の言語活動例を対象とする。説明・報告・あいさつ・紹介・討論等はもちろん、尋ねたり応答したり、グループで話し合ったりすることも含まれる。他者とのコミュニケーションのための対話活動と自己の内部における思考のための自己内対話活動が考えられるが、ここでは外言としての対話活動に焦点を当てる。コミュニケーションの定義は様々あるが、ここでは、人と向き合い、双方向で言語行動を行いながら他者との関係をつくり、新たな発見をしたり考え方や関係づけを産み出したりして、自己を高め豊かにしていくプロセスだと捉える。コミュニケーションの基本を対話として考える。今回の研究は教科を国語科に絞り、児童の対話力を高めながら、対話活動の目的、内容、そして方法についての研究を深めていく。

6 研究の仮説

(1) 学習過程に目的を明確にした対話活動を位置づけていけば、児童の対話活動が活発になり、他者とのコミュニケーションを愉しむ児童が育つだろう。

7 研究の内容と方法

(1) 国語科の授業作りにおいて

- ①対話活動を活性化し、児童の対話力を向上させるために、指導の目的を明確にする。
→目的を明確にした授業実践を行う。単元または1単位時間に目的と方法を明確にした対話活動を入れる。各学年グループより1名が全校研究授業を行う。研究会においては対話活動に焦点を絞り、研究を深める。昨年度作成した実践カリキュラムを更に深めたり、広げたりして検証する。
- ②対話力を向上させるための様々な言語活動の理解と、その組み立てを具現化する研修を行う。
→理論研究・実践研究において講師を招聘し、教師の指導力を向上させる。

(2) 児童の言語活動を支えるために

- ③児童の対話能力の実態をもとに、指導に生かすための研修を行う。
→児童の語彙力や対話力の実態から、めざす児童像を明らかにし、指導の手立てについて話し合いを持つ。対話活動を学年グループ別に整理し、実践していく。学年グループの取り組みが中心となる。
- ④話す・聞く系統表の作成に関する研修を行う。(年度末に各学年グループ分を作成する)
→昨年度末に完成した聴型表の加除修正を、各学年グループで行っていく。
- ⑤各言語活動における手引き作成に関わる研修を行う。(司会者の手引き・ディベートの手引きなど)
→教師が作成した手引きを共有化できるようにする。

(3) 基礎基本の力を育てるために

- ⑥チャレンジタイムの位置づけや内容に関する研修を行う。
→朝の学習の提案に基づき実践をする。成和小学校詩の百選を活用する。

8 これまでの研究成果

平成21年度の研究では教師が対話力・対話活動自体を知り、身につけさせたい対話力とは何か、対話活動をどう仕組むのかを明らかにしながら児童の対話力育成と対話活動の活性化を目指した。平

成 22 年度は鼎談の取り組み方とその有効性を明らかにしてきた。下記のような成果が得られた。

平成 21 年度、10 個の財産

- ①教師によるモデリングの大切さ、教師自ら教材を作ること。
- ②相談タイムの人数は 3 人が適当。
- ③児童に目的意識を持たせれば、意欲的な活動が見られ、活動自体が深まる。
- ④聴型表は飾りではなく、活用すること。
- ⑤話し合う必然性がないと、話し合いは形だけで終わってしまう、必然性を持たせる。
- ⑥教師が自ら作った例文を指導上大切にすること。
- ⑦対話活動の後に書く活動を入れ、児童の変化を見つける。
- ⑧対話形式の授業を積極的に取り入れる。
- ⑨教師自身がよき聞き手、話し手であること。
- ⑩教師の引き出しを増やすために、更に研究を深めること。

教師自身の意識の変わってきたことが何よりの成果だと言える。本年度は昨年度の財産を更に深めたり、また増やしていくことが課題となる。主な今年度の課題は、児童の対話力を高めつつ、学習過程における対話活動の位置づけ、対話活動の有効性、対話活動を思考力や判断力に結ぶ方策を探ることである。

平成 22 年度鼎談 10 箇条作成・・・鼎談の有効性の 10 箇条

- ①安心感を持って、話し合いができる
 - ・ペアではすぐに答えなくてはならないが、1 人の話し手に対して 2 人の聞き手がおり、余裕を持った話し合いができる。
- ②強い話し手・聞き手が育つ
 - ・立場を明確にすることにより、自分の考えはもちろん、自分の考えとは違う立場からも考えが言えるようになる。聞き手についても同様。
- ③司会力を身につけることができる
 - ・2 人の話をスムーズに進める第 3 者が存在し、2 人の考えの共通点や相違点を比べながら話し合いを進めることができるようになる。
- ④そのまま全体の話し合いに生かせる
 - ・報告者という立場を設けることで、まとめることよりもどんな話し合いがなされたかを伝えることで、全体に広げることができる。
- ⑤ひとりひとりの考えが反映できる
 - ・対立する考えを持たせるのではなく、違う立場に立って考えを持たせることで、ひとりひとりの考えを大切にしたい話し合いができる。
- ⑥協力して考えを出すことができる。
 - ・ペアで教えると教える側と教えられる側に分かれてしまうが、中間的に見ることのできる子どもがいるので、お互いの足りないところを補いながら、考えを確認しながら話し合うことができる。
- ⑦リーダー性を育むことができる
 - ・3 人の話し合いでは、考えをまとめる立場の子が必要になる。また全体で説明する子も必要になる。それぞれの役割が明確になると同時に、リーダーが育ってくる。
- ⑧言いたいことが言えるようになる
 - ・おしゃべり感覚で話すことができる。常に司会者を立てて、全体での話し合いを意識するのではなく、休み時間の延長のように気軽に話すことができる。
- ⑨話す自信を持てる
 - ・話さなくてはならない立場に立つので、話し合いに参加しているという自覚が育つ。全体へと結びつけることで、2 人の友達に支えられ、話せるようになる。
- ⑩対等グループが生まれ、全体の話し合いが広がったり、深まったりする。
 - ・ペアに比べ、鼎談では同等のグループが形成される。グループ同士の話し合いをしたり、聞いたりすることでお互いに考えが広がったり深まったりする。